広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語の文体
Author(s)	ラム チファン,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1997 : 101 - 106
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039387
Right	
Relation	

日本語の文体

ラム チ ファン

1.はじめに

「日本語の文体」というテーマを、話し言葉と書き言葉における性差の特徴として、研究するつもりである。言葉の男女差はヨーロッパ諸語には見られない日本語の特徴であると思う。男性と女性それぞれの使う言葉の特徴を比べることは、言葉のいろいろな側面について可能である。まず、日本における女性語の地位と歴史的変化について考える。そして、男女の話し言葉と書き言葉を比較して、それぞれの特徴や傾向を研究するつもりである。

2.歴史

文献史料によると、男性と女性の言葉の違いは、中世（1086-1573）以前にはほとんど観察されていない。女性語が明確な形で出現したのは室町時代（1338—1573）の女房詞が初めてである。女房詞というものは京都の宮廷に奉仕する貴族階級の女性によって作り出された、婉曲表現や丁寧表現が多い言葉である。その時、地位と身分の上下意識を反映して敬語がすでに発生していた。でも、敬語が上流婦人の品位を示すものとして女房詞の一部として発達しました。女房詞は貴族と王族から政治の実権の移行とともに武士階級へ伝えられ、さらに富裕な町人階級へ優雅な語として伝えられていた。

近世（江戸時代、1603-1867）になると、江戸が政治、文化の中心になり、関西．東海地方出身の武士と町人が男女差が豊かな関西方言を規範として、後の「東京山の手言葉」の母体となる江戸語を形成した。明治時代になると政府は近代国家にふさわしい統一された言語、「標準語」として「東京山の手言葉」を選択し、それを学校教育や新聞によって全国に普及させた。関西と東京以外の地方においては、この標準語の普及とともに、女性語が初めて生活の中にもたらされたのである。それで、標準語化に伴う女性語の使用状態は、現代でも地域とか教育程度などによって違いが見られる。

2.1「女房詞」の歴史

この「女房」というのは、今の女房ではない。これは、昔宮中で個室を与えられたほど身分の高い女官のことである。「女房詞」は室町時代の初め頃、京都御所や院の御所などの女房たちが、日常生活の語について特別の言い方を考え出したのが初めとされている。この女房詞は、後に王族や貴族の令嬢が将軍家や大名家に嫁いで行くのにつれて、武家の奥向きへ入って行き、さらに一般の庶民の社会へと普及して行くのである。

当時の文献から主な女房詞を見ると、次の例がある。飲食に関するもので、飯のことを「大供御」、餅を「かちん」、豆腐を「かべ」、酒を「九献」、水を「お冷やし」「お冷や」「井の中」などといったものがある。けれども、時間に経ってから、いろいろな女房詞は一般社会に入ってきて、女房詞の意識が失われてしまった。例えば、「お冷や」

「かもじ」「しゃもじ」「ゆもじ」など、現在では一般の語として使われている。

3.話し言葉

日本語では、男性の話し言葉と女性の話し言葉はかなり違っている。言葉の形や表現だけでなく、話すときの声の強さ、柔らかさ、高さ、低さ、抑揚、イントネーションなどの音声的な特徴や姿勢や身振りや態度に至るまで、いろいろな違いがある。

3.1　語彙

3.11 人称代名詞

1人称「ボク、オレ、ワタシ」2人称「オマエ、キサマ、アナタ」の代名詞の使い方にとって、男性の話し言葉と女性の話し言葉とは、著しく違う。インフォーマルな場合では一人称代名詞は、女性は「わたし」「あたし」、男性は「ぼく」「おれ」である。2人称代名詞は女性は「あなた」、男性じゃ「おまえ」を使う。人称代名詞は、場面や話し手の相手との親疎や上下関係にしたがって選択されますが、一般に女性は男性より丁寧な人称代名詞を使う。

3.12 呼称

呼称に使われる敬称は男性より女性の方がフォーマルな形「さま、さん」をより幅広く使う。男性はよりフォーマルでない形「くん、呼び捨て」の使用が比較的多いです。夫婦の相互呼称には男女差が顕著に見られる。日本では夫が妻を「おまえ」で呼んだり名前で呼び捨てし、一方妻は丁寧な表現である「あなた」で呼ぶことが最も一般的なパターンである。

3.13 感嘆詞

一般に女性は「あら、まあ」「おや、まあ」などと、柔らかい語感のものを使うことが多く、一方男性は「よおっ」「ちぇっ」など激しい言葉を使う。また女性に比べて男性のほうが感嘆詞をより頻繁に使用し、その種類も多様である傾向がある。井出祥子氏の調査によると、日本の大学生の自然発話中、男女それぞれ1000発話のうち男子大学生は655回、女子学生は395回と男子の方が感嘆詞の使用回数が多い。その上、感嘆詞の種類が多様で独創的であるのは男性の方である。（井出祥子「大学生の話しことばに見られる男女差異」）

3.14 形容詞

「すてき」「すばらしい」などの甘く感情的なニュアンスをもつ形容詞は女性により多く使われる傾向にある。一方、「いかす」「でっかい」などの粗野な語感をもつ形容詞は

男性によってより多く使われる傾向にある。

3.15 副詞

「とっても」「すごーく」などの強意の副詞は、女性に強いアクセントと抑揚をつけて多く使われる傾向にある。波多野完治氏の調査によると、「とても」「非常に」「うんと」など、程度の強さを表す副詞は100字分の文章当たり男性は2.8回、女性は3.8回だといいう。

3.16 漢語

古来、漢語は「おとこもじ」と言われ男性が使う言葉されてきた。現在でも漢語は女性よりも男性のほうに多く用いられる。土屋信一氏の調査によると、自然会話の録音資料で、漢語が全体に対して占める割合は男性－くつろいだ場面では 18.6%、改まった場面では22.5%、総平均20.8%、一方女性－同じく 12.0%、15.5%、総平均14.9%である。（土屋信一「話しことばの中の漢語」）

3.17 話題

男性と女性はその生活空間の違いから、用いる語彙が異なっている。高校生対象の質問紙法による調査結果では、男子の話題は野球、スポーツ全般、車などであり、一方女子の話題は食べ物、芸能人、服装などである。（日野英子「高校生にみる男女のことばの違い」

3.2 形態

3.21 終助詞

終助詞には、女性と男性それぞれに特有なものがある。終助詞「わ」「のよ」「かしら」は女性特有、「ぞ」「ぜ」「な」「かぁ」は男性特有である（井出祥子「大学生の話しことばに見られる男女差異」）

また、相対的に一方の性に多く用いられるものもある。「ね」「の」は女性に、「よ」「か」は男性により多く用いられる終助詞は主張や断定を弱めたり共感を表し、男性のはそれを強めるはたらきがある。

3.22 敬語

女性は男性よりも丁寧な言語表現を使うことが期待されている。例えば「いつ行くか」を尋ねる際の表現を調査した結果では、男性が「行くんですか」と言うとき、女性はより丁寧な「いらっしゃるの」が多い（井出祥子「女性の敬語の言語形式と機能」） けれども、女性の敬語使用は減少しつつある。映画のシナリオ中の夫婦の会話の世代別分析結果では、丁寧語の「です」「ます」の使用率は年配の妻56.1%、若い妻7.9%とな

っている。（金丸芙美「夫婦間の会話における性差」）

3.3 音

3.31 イントネーション

イントネーションは女性のほうが豊かである。質問文の終わりで女性のほう尻上がりのイントネーションを使う比率が高い一男 67%、女 84%（大石初太郎「ことばの昭和史」）卓立の高調イントネーションというのは強調を示す。これも女性のほうに多い一男 17.7 秒に一度、女 10.3 秒に一度（野元菊雄「女のことば」）

3.32 音韻

女性のほうがより標準的な発音の変種を使う傾向にある。男性はインフォーマル場で「きたない」を「きたねー」、「すごい」を「すげー」ということがあるが、女性がこのような変種を用いることはない。

3.4 談話

3.41 相つち

女性のほうが男性よりも頻繁に相つちを打つ傾向にある。東京の大学生の男女の自然発話中では、男女各々1000 発話のうち男子 76 回、女子 124 回であり、女性は男性の約 2 倍も相つちをうっている（井出祥子「大学生の話しことばに見られる男女差異」）。相つちは相手の発言への支持を示す表現である。したがって女性のほうが数多く相つちをうつということは、男性の方が会話をリードしていることを表わしている。

3.42 挨拶ときまり文句

女性のほうが男性よりも、挨拶やきまり文句を重視し厳密に遵守する傾向にある。客として他人の家に招かれた場合、あがるときには「お邪魔します」と言い、帰るときには「お邪魔しました」と言わなければならない。このようなきまり文句を上手に使いこなすことが特に女性には大切とされている。

4.書き言葉

4.1 語彙

4.11 形容詞、副詞、直喩

女性は男性よりも形容詞をより多く用いる傾向にある。小学生から高校生までの作文調査によると、動詞 100 語に対して男子 15.6 語、女子 18.7 語と女性のほうが形容詞を多く使う傾向がある。波多野完治氏の調査によると、「とても」「非常に」などの程度の強さを

表す副詞は男性よりも女性のほうに多く用いられる傾向にある。1000字の文章当たり強意副詞の出現頻度の平均は男性2.8回、女性3.8回である。(波多野完治「男の文章と女の文章」)。

直喩とは、例えば「針のように鋭い神経」のように、ある状態を感覚に訴えるイメージによって説明しようとする表現である。女性は男性よりも文章に直喩を多く用いる。安本美典氏の調査では、「花のようににきれいな人」などのいわゆる直喩は、400字詰め原稿用紙30枚当たり、男性作家25.67個、女性作家36.89個と、女性のほうに多く使われている。(安本美典「男の文章、女の文章、青年の文章、老年の文章」)。

このように女性の書き言葉には形容詞、強意の副詞と直喩が多いが、これは、女性の文章は主観的かつ情緒的な表現が多いという印象を与える。

4.12 漢字

昔の日本では漢字を男文字、仮名を女文字といっていたことからも分かるように、女性は原則的には漢字を使うことはなかった。現代では、社会制度の上からも、慣習の上からも、漢字について男女の差はないことになっている。しかし、一般に、男性の方が漢字を多く使う傾向があると言われている。

ある雑誌「PHP」の文章の中から、男女各4人、計8人の文章を選んで、その頭から200字ずつを抜き出して調べてみた。調査の結果では、漢字を使うのは男性が女性を上回っていることが分かる。この8人のうちに、平均で、男性が60.75漢字を使って、女性が55.25漢字を使った。けれども、もちろんたったの8文章の、しかも頭から200字だけの調査であるから、日本人全体がそうであると断言するのは危険である。

5.まとめ

言葉の男女差は年々縮まる傾向にある。男女ともが歩み寄って用語や表現が中性化しつつあるというよりも、基本的な流れとしては、女性専用の語がすたれ、これまで男性が主として使ってきた普通の言葉を、男女共通のことばとして、女性も自由に使うようになってきている、という現象と受け止めてよいであろう。

しかし、男女それぞれの傾向というレベルで、いろいろな興味深い事実が見つけている。男性においては、(1) 感動詞の使用頻度が高く、その種類も多い、(2) あらたまった場面での漢語の使用頻度 (3) くだけた場面での俗語のまじる割合が大きい (4) 発話中で倒置構文の占める割合がそれぞれ大きいといった点に特徴がある。

女性の場合は、(1) 問い掛ける際に上昇調のイントネーションになる割合が大きい (2)「お台所」などの敬語、「すてき」という主観的な評価を伴う形容詞が多い (3) 俗語を避ける (4) 紋切りがたの挨拶や相づちが多い。構文上では (5) 文末を言い切らない形で終わる例が多い。文章を書く時 (6) 形容詞や「とても」のような強意副詞、それに比喩表現を多く用い、文末に余韻をもたせる例が多いというように、見つけている点に多岐にわたる。

6.参考文献

加藤彰彦、「日本語概説」
平井昌夫、「ことばの生活事典」
金田一春彦、「日本語百科事典」
加部佐助、「日本語話題事典」
高崎みどり、「男の文体、女の文体」『言語』23 号
三島由紀夫、「文章読本」